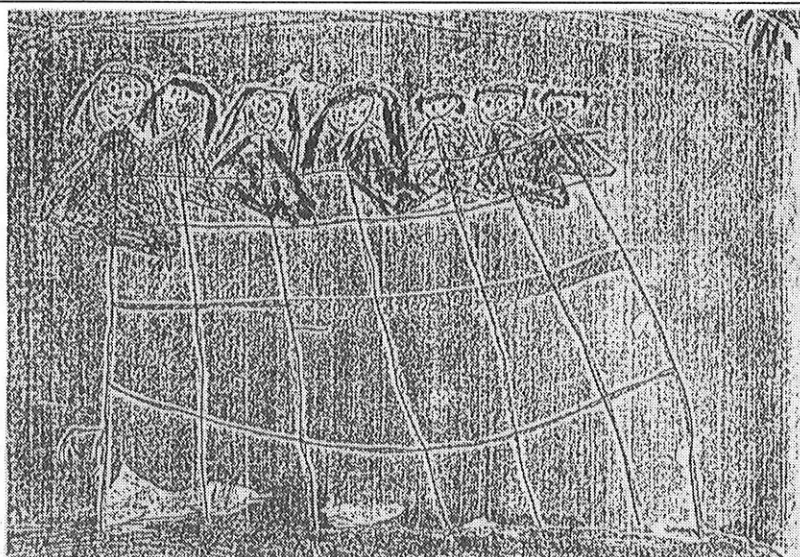


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替／東京3-128022
 印刷／(株)ドモン企画

私のジャングルジム



ばらぐみ あつみ ゆうこ

アブラハム（創世紀十二章以下）

理事長 福島 勲

イラクがクエートを併合して、と摩擦を起こすこともなかった。世界の舞台裏が急に騒然としてきた。

思えば、イラクは世界文明の発祥の一地点である。紀元前五〇〇年カルデヤのウルは文化的に繁栄していた。今世紀はじめ英国の考古学者ウーリーらの発掘によって、高度なスメル文化が報告されている。一年十二カ月の暦があり、戦車の発明、円筒印章や女のかつらが使用されていた。

このウルからアブラハムの父テラが一家を連れて、ユーフラテ川の上流ハランの地に來た。今から四千年ほど前のことである。

アブラハムはその行き先を知らずして、神の命に従い川を渡り荒野を経て、パレスチナにはいった。（ヘブル・十一・八）

彼らは武力をもってする侵略者ではなかった。神の約束された地パレスチナ（ペレシテ人の住む地の意）にはいり、先住民

と摩擦を起こすこともなかった。彼の妻サラの墓地为礼を尽くしてヘテ人エフロンから銀400シケルで買い取っている。（創二三・十四）

アブラハムの人類への貢献の一つは、唯一絶対神の確認である。

ウルでもセラピムなどの偶像が拝まれている。そのような中でただ一人の神を拝するようになったアブラハムは、まことに奇蹟的な存在である。

このことが倫理、道徳、政治、教育の基本となっていく。

一旦エジプトに下ったアブラハムは、すべての持ち物を携えて、ネゲブに上ってくる（創・十三・一）甥のロトも一緒である。

両者の牧者たちに争いがあつた。そこでアブラハムはロトに争わないよう別れて住もうと言う。

あなたが右に行けば、私は左に行こう、あなたが左に行けば私は右に行こう、とアブラハム

養育の眼

施設長 今関 公雄

は言う。ロトは目をあげて、豊かな牧草の茂る低地を選んで進んだ。

人生はある意味で選択の連続である。常に肥沃と思われる方を選ぶ、が結果は必ずしも予期するものではない。ロトの住むソドムの地は、最悪の地として新約聖書に記される。ロトは周辺の民族の同盟軍によってつれ去られるがアブラハムは長駆して奪い返し助けている。

アブラハムこそ共存共栄、協力、互助を願う紳士であった。特筆すべきは、アブラハムが神から、その子イサクを犠牲として捧げるよう命ぜられる件である(創・二二)斧を振ってあわやと言うとき、神の声があつて差し止められる。アブラハムの信仰が試されたことであるが、われわれの救いを完成されたことを思い及ぼさずにはおられない。神の絶対の愛の前に、われわれ生きるといふことは何なのか、何をなすべきかを考えさせられる。

文明は進展しても心の文化に歩のないことをも痛感する。

光の子どもの家の歩も六年目の後半になり、養育環境も人的にも物的にも整えられてきました。心から感謝しております。子どもたちの健やかな発達を願い、責任担当制による家庭的養育を進めて参りました。

先頃、よく晴れた休日、所用の電車の中で、行楽帰りの親子の風景に出会いました。

手をつないだ母子がいそいそと乗り込んで来て、楽しかったことなどを思い出して語り合っていました。しばらくすると、心地よい疲れを覚えた子どもが、母に全身を委ねて寝入ってしまった。こんな光景は珍しいことではありません。特に、乳幼児であれば、母の懷ですやすやと安らいでいます。

このような光景に出会うと、微笑ましく思い、この小さな平和こそが、子どもの心身発達にとって、根底的な栄養になっていると確信するのです。

なかで、時折、情緒的不安をのぞかせ、幼児期に親の懷や背中を知らなかつたであろうと推察させられることがあります。

何か特別なことではなく、自分が確かに全身で受けとめられ、愛されているという実感を持つことができないような取り組みの必要性を痛感しております。あの車中での母子の小さな平和の世界は、養育の基礎を示しているの思いを強くしています。

以前、保母養成大学の教師であつた頃、実習している学生を激励するために、ある施設に向かい、巡回して他の施設へ向かいました。バスに乗り合わせた親子が外の風景を見ては「あの新築のビルは、体育館で、今度遊びに来たいね。」「アラーこつちにも新しいビルができたのね、何かしら。」と、話に夢中です。私にはうるさいと思われるほど尽きることがないのです。

しかし、今、辞してきたばかりの施設での会話風景との、大

きな差異に思いを致し、強い衝撃を感じていました。

施設での会話は、集団生活の動きのために必要な、禁止、命令が大半であつたのです。

それにひきかえ、この会話は、表情も豊かで生命に溢れた言葉の交流でした。

言語習得もまた、このような親子の会話風景のようなところで自然な形で身につけるのであらうと、改めて思われました。

子どもたちの初期の人格形成で、基本的信頼による希望、自律感による意志力、自発性による目的意識、などの涵養が重要です。その基本的欲求として、愛情、所属、自己尊敬があげられ、その欲求充足が求められます。

この点、先の日常的な親子の風景は、子どもたちの成長に必要なものにつき素朴な示唆を与えるものです。尽きるところ、個人として尊重される施設の生活風景へと至るでしょう。これが至難の課題であることを自覚しつつ、この養育の眼を持ち続けます。

エッセイ

我楽苦多荘にて

県立高校教師 中島 睦雄

我が我楽苦多荘は、今蟬しぐれの中にある。朝起きるとすでにまわり中に溢れる蟬の声でやかましいほどである。いったい蟬は朝の何時頃から鳴き始めるのだろう。子どもの頃からなじみのミンミン、ジージー、オーシンチヨコの三種類が命の限りを尽くして鳴き競う。炎天を鳴き通して夕方になるとカナカナに代わり、そのうち人間たちは蟬の声を意識しなくなつて、それが夜である。

今朝もいつもと同じように目が覚めた。アルミサッシの窓を開けると、一斉に蟬の鳴き声が飛び込んできた。まだ食事までには間があつたので、書家の山崎裕之さんから送られてきたテープを聞いた。彼の友だちの小原孝さんのピアノである。「猫はとってもピアノリスト」というタイトルが示すように、猫に関する十六曲が入っていた。非常におもしろい。小原さんは由紀

さおりの伴奏をしたり、ご自分の演奏活動などで、今人気急上昇中の人である。私の友だちの友だちだから、小原さんも私の友だちだといいたいが、少々無理があろう。一度もお会いしたことがないのだから。けれども、これらの猫の曲は親しめる。うまい。そして楽しい。もし私の少年時代にこの演奏に出会っていたら、もつともつと音楽に憧れをもつたに違いない。

窓の外にはいろいろな植物が見える。カシワ、モミジ、サザンカ、ツワブキ、ヤツデ、モツコク、ザクロ、カキ、ハギ、クマザサ、ギリシヤから来たアカンサス、ジュロ、エノキ、イチヨウ、ケヤキ、そんなものが向こうまで続いている。私はこんな中にいるのが好きである。都会人は言う。ダサイ、イナカだから。しかしそう言われてもこの土地が好きである。父我楽苦多荘は我が家である。父

が晩年に近い頃、自分の人生をふり返つて要約し、そう名付けて門柱に小さな表札をかけた。普通、苦の文字を入れない我楽多というのはいくらか見かけられる。又、二十年ほど前までは、小さな離れ家があつて、そこには「空民庵」と書かれた板が掛かつていた。むなしい民のいほりとは、少々ニヒリズムのにおいがしないでもない。おじいさんがそう名付けていたらしい。そして自分自身も空民居士と、いろいろな書き物に署名している。

我楽多荘空民庵に蟬が鳴くとなると、何となく空蟬という言葉を通して、この言葉は、仏教無常観に立脚した言葉かも知れない。この世は空蟬の世であるとする考え方がつたてくる。しかし、そのような空蟬の世にありながら、我々は何も知らずに悪戦苦闘して生きながらえている。自分の権利を主張し、欲望を次々と満たし、他人を思いやらず、いさかいを繰り返しながら生きている。ことによつた

ら、をの己を知らない限りない欲望の追求が、即ち我々の滅亡への道であるかも知れないのに。このところ夜になると、猫たちが蟬を捕つてくる。バタバタ羽音をたてながら必死でもがく蟬を、猫は思う存分いたぶつたあげく、羽だけを残して食べてしまう。その上最近は何猫までもが、まだ地中の穴から出たばかりで羽化しない幼虫を捕まえてきては、殻も残さず食べてしまう。猫たちは、その本能によつて導かれるままにタイミンが良く、草むらや林の中を徘徊すれば、必ず二匹や三匹の幼虫に出会うことであらう。

屋間の暑さの中で、長々と伸びて寝ころんでいた猫たちが、元気に活躍し始める夜になると、我楽苦多荘のまわりも静かになつてくる。ふと考える。我楽苦多という文字に、その住人たちはそれなりの意味付けをもっているのだが、第三者からみれば、それは単なるガラクタに過ぎないのではなからうかと。

現場から

四季の彩り

竹下 由香

「子どもたち一人一人に、楽しい経験と素敵な思い出を創るために」を職員集団で確認し、特に、いつも最もよい時間帯を学校で過ごしている子どもたちが、二四時間一緒に過ごす『夏休み』の生活と行事への取り組みをこの夏も開始しました。

子どもたちと素晴らしい経験をするには、関わる職員が大変な思いもしなければなりません。それでもしていくという決意なしでは、子どもにとっても大人にとってもそれほど意味のあることにはならないでしょう。

今年もタカラクラブ（扇千景代表）の方々のお招きで軽井沢のゲストハウスを利用して頂き、本当に大変お世話になりました。ありがとうございます。

今回も軽井沢には、小学一・二年生と幼児が参加して素晴らしい経験をする事ができました。小学一・二年生のグループは虹の会といい、軽井沢での四日間を担当者から離れ、虹の会の

メンバーを担当に持たない私と一緒に生活と活動をしました。年齢を横割りにしたグループ

は他に二つありますが、活動の目的は、これまで負わされたマインスや、これから負わなければならないだろうそれに負けないで、むしろそれを訓練に変えていけるよう、励まし、支えあうことのできる仲間として育つように意識を形成することです。

横割りグループの活動のメインになりつつある日常的な環境整備と夏休みの山登りは、登山が辛くて泣き叫んだ子どもが、「そんなことでは、山登りに連れていかないぞ」と言われ「いやだあ」と応え、今年はどこにいついけるんだろう、と心待ちにし、楽しみにしているのです。

もう数年来登山などしていない私には、そんな子どもたちの思いに共感できず不思議にさえ思えました。それでも、こんな子どもたちを夢中にさせる何かがあるのだらうと、半分は期

待、半分はしかたないと、妙義山の外輪の物語山に挑みました。登山が大好きな頼もしい田中、坂巻先生と一緒に、ガイドブックの埋蔵された宝物の伝説に、胸を躍らせる子どもたちと、一時間程で、なだらかな山道に、木にすがり、鎖にしがみ急斜面をよじ登ります。

この頃には、体力が心配だった多歌音ちゃんが大声で泣き出しました。臆病なことでも一番の多歌音ちゃん、足のすくむ思いだったでしょう。泣き声は山々にこだまして響きます。

それでも後戻りはできません。前に進むしかないので、自分の身を守ることを、安全を確保することしか考えられなかった私に、多歌音ちゃんの手をのぼしがみついています。すんでのことで、私も「助けて」と、誰かにすがりたくなります。

でも、子どもたちより年齢や体が大きくだけの私を頼りきっている多歌音ちゃんです。ぼつちやりました多歌音ちゃんを片手で持ち上げるのは、決して簡単なことではありませんでし

たが、他の子どもたちの「たあちゃんがんばれ！」と口々に励まされて、私も多歌音ちゃんもたくさん力づけられました。本当に、みんなの励ましによって、やつとの思いで頂上まで登ることができたと思います。多歌音ちゃんもよくがんばりました。

宝探しを目的にしていた登山で、みんなが「宝物なんかないじゃないか」と口々にいいました。すると、一年生の高橋君が「みんなで助け合って登れたことが宝物なんだよ」と名セリフ。みんな無言の納得の顔、顔。

たくさんたくさん助けてくれた仲間たちです。心から「ありがとう、おかげで助かったわ」というと、多歌音ちゃんも「ありがとう」と思わず、この思いが今まで共感することのできなかった想いなのでしょう。

翌日の左腕の筋肉痛がなんとも心地よく、いつの日か、またこの子どもたちと山登りがしたいなと思う自分の意識の変化に、何よりも驚かされました。

☆プリズム

まなざし……

佐藤家

あれほど騒がしかった蟬の声が、いつの間にか聞こえなくなり、涼やかなおそろぎの歌声が子守歌になる季節となりました。楽しかった夏の思い出を胸に、子どもたちもまた、学校へ通い始めました。今年の夏休み、佐藤家の鷹文君、睦男君、擢也君、珠弥ちゃんの四人は富士山に登りました。

静岡から一ヶ月に一回佐藤家に遊びにくてくれる、千葉正樹さんのお招きです。富士山は、去年に続いて二度目の挑戦です。前回は睦男君が見事頂上を征服しました。そのときに八合目を目前に惜しくも下山した四年生の鷹文君に、今年こそ、ぜひとも雲の上からの絶景を見せてあげたいと、みんなで頑張りました。途中で引き返した珠弥ちゃんを別にして、最初のうちこそ、一番最後を歩いていきましたが、六合目で先を歩いていいた擢也君や照子さんに追いつくと、それからGOOGOで鍛えた鷹文君の健脚の見せどころです。とはいっても、富士山は並大抵の山ではありません。擢也君と二人、後になつたりさきになつたりしますが、なかなか前へは進みません。十メートル先の岩を目標にして、あそこまでいったら十数える間休もうね、などと決めながら何とか上をめざします。それからどれだけ経ったでしょう。視線を十メートル先から、上の方へずらして見ると、やったあ！頂上が見えました。それからもう、ずんずん登ります。そして、去年、睦男君が登ったときよりも、なんと二時間も短縮した六時間十五分で、鷹文君は擢也君と共に日本一の富士山の頂上に立ったのです。ちなみに、昨年さんさん苦労した睦男君は、それよりさらに二十分ほど早く登りきってしまい、時間を持て余したので火口を一周してきたと、涼しい顔をしていました。

新学期、うんと苦労した夏休みの宿題を持って、子どもたちは学校へ向かいます。鷹文君と擢也君のランドセルに、富士登山の作文が誇らしげに納まっているのは言うまでもありません。坂巻 直之

☆プリズム

子どもたちの季節

仙道家

「あー！ここ覚えてる！」

着いた途端に萌季ちゃんが、懐かしそうに歓声をあげました。この夏も、親元に帰省できない子どもたちを連れて、潮の香の流れる湯河原の府川さんのお宅にやってきたのです。温かなご夫婦の笑顔のおもてなしを受け、三回目の萌季、亜季ちゃん、初めての嬉、亜季君、啓二君も、すっかり八海のお家Vに馴染んでしまいました。陽の光を受けて輝く水面、波のはじける音、そして、人々の歓声。どうして海は、こんなに人の心を解き放つことができるんでしょう。

「んーとね、あつちの舟まで行つたんだよ」と口べたの嬉君も得意気に報告。小学校四年生になり、生意気盛りなのですが、波と戯れているときの笑顔は思わず微笑み返したいほど愛らしく自由です。亜季君と啓二君は、一週間前に入所したばかりの兄弟です。兄は浮き輪なしでも海にはいれますが、決して一人では楽しみません。「おい、啓二、来いよ。」啓二君には、誰よりも信頼できる一言で、波に向かい遊ぶことができました。

亜季ちゃんは、波打ち際で、チャブチャブていどでしたが、日に焼けた笑顔には八満足Vと書いてありました。萌季ちゃんには、タイミングをはずして大波をかぶつても余裕の笑顔。去年一人で海に入れたかったとは思えないほどの成長でした。

夏の海を全身で経験し、府川さんを始め、戸辺、薫さんなど湯河原の熱烈な支援の方々の善意に包まれた四日間。水着の跡は消えても、決して消えない美しい思い出が子どもたちの心に残るでしょう。季節は収穫の秋。湯河原で頂いた皆さんのことども。今すぐ収穫を確認するには余りにも大きすぎます。いつの日か、きっと。今は感謝ばかりです。ありがとうございました。心から。岩崎まり子

★プリズム

原田家日記

四〇日間の夏休みが終わった。その間に、周囲の田圃は緑から黄色に変わり、重そうに頭を垂れた稲が豊かな実りを告げていた。子どもたちもまた、稲のように豊かに成長した。

夏休みは、おたふく風邪で始まった。夏休み行事第一弾である、小学校一・二年生の「虹の会」と幼児が参加する軽井沢行きに、福子と一志は参加できなかったのである。原田家からは小学二年の漢子、小学一年の高雄、多歌音、幼稚園年中組の環が参加。

八月二四日、「猛暑を予感させる日差しの中、おたふく風邪なのに耳下腺の腫れがよく分らないほど丸まるとした体軀の幼稚園年中組の福子と、食事でもできないほど耳が痛くて、これ以上瘦せないで欲しい幼稚園年中組の一志を残して、一行は出かけて行った。

いよいよ軽井沢でのメインイベントの登山である。虹の会は物語山。多歌音はペソをかき、漢子はぐずぐず、高雄は職員を助け仲間と登頂。お宝があるとのガイドブックを信じ登った虹の会の面々。「何も宝物なんてないじゃないか」のブーイングを高雄が見事にしめる。「みんなで助け合って登ったことが宝物なんだよ。」下山は突然の雨で泥まみれになるが、みんなお喜びであった。

一方、碓氷峠に参加した環は「だつこ、歩けない、帰る」と言いながらも自力で登り、峠の力餅をたらふく食べる。しかし次の日、おたふく風邪に罹り、一足先に信恵さんと戻ってくる。高雄、多歌音、漢子は全日程を終えて無事帰ってきた。

環がおたふくグループに加わり、七月最終土曜日。ついに高雄、多歌音も！。ついに原田家は「おたふくの館」と化していった。

さしものおたふく旋風も落ちつき、教会学校の夏期学校、家庭帰省、担当保母宅にお泊まりしたり、花火大会、バーベキューと楽しさや、宿題に追われることもきちんとやって。太陽をいっぱい浴びたひまわりのように輝いた子どもたちの夏だった。池田 祐子。

☆フラッシュ

育つ—GOGO会と

竹花 信恵

八月三〇日、夏休みさながらパーティーの会場。「山登りががんばりました。」胸をはって報告する紅潮した顔、照れた顔、余裕たつぷりの顔。三・四年生グループ「五五会」の八人のメンバーだ。

九時半に登り始め、四時半下山終了。急拠、代役でついていくハメとなった保母はこの間、「引率者」と言うより、必死でピリについていく子どもに変身してしまつた。疲労と緊張の心に、前を行く一人ひとりの子どもの姿が、一つ一つの場面ごとに焼きついていく。

いきなり鎖場。岩肌の途中で、鎖にしがみつき「こわい！」と泣くのは三年生の紅子。この日初めての、そして最後のわずかな数秒の泣き声。先生の励ましと指導でその後は、軽業師のような身のこなしとなった。「道がない！」と言う先頭を行く滋の声。様子を見ている間にズルズ

ルと足を踏み外す三年生の研一。自力で這い上がる。「その木につかまれ」と適切な判断の声をかけた四年生の鷹文。自分のことだけでなく友だちを励まし、後ろを気遣う子どもたち。保母にも「ここ滑るから気をつけて」と滋。誰が一番初めに「疲れた」と言うか。意地でも言わない、とライバル意識をチラツと見せる三年生の潔。始めて参加した三年生の亜季羅は抜群の体力を見せる。ある時は先に行きたくてしょうがない気持ちを抑えられながら、自分のことだけではダメなことを教えられていく。みんなそうやって教えられ、鍛えられ、ここまでたどりついた三年間。四年生が一年生の時から「山登り」が苦しいけれど何より楽しみな子どもたちになった。泣いて座り込んでしまう昨年までの加津子も、一瞬の「ぐずり」のあと、「ヨイショッ」と独りでかけ声をかけ歩きだした。自分で頑張らなければ誰も助けてくれない、というすべてに通じる出発点から重ねていく体験を、もう一つ重ねた夏が終わった。

養護メモ 29

自立

入野隆の場合

最終回

菅原 哲男

子どもが自立にむけて成長していくことは、その子どもの状況によつて一様ではない。どんな書籍の揃っている図書館で調べても、入野隆の自立について書かれているものはない。

隆の一回限りの生き方を求め、自立の過程を生きる以外はない。そして隆が会おう人々は、隆の生き方に関わり、その時々、役割に応じた影響を相互に与える。その影響が、隆の自立や生き方に、よりよいものであることを願う以外に手だてはない。

学校で出会う教師に愛されることは、家族の愛に匹敵し、その人生に家族も及ばない決定的な影響を与える。特に、教育や養育に関わる人々は、その可能性の中で関わることに畏れの念を抱きつつ取り組むのである。

しかし、時としてその関わりを根底をなすものの故に、愛されているよりは厄介に扱われているように思われることが少なくないのである。

隆の小学校一年の一・二学期の終わり頃まではいつもそのような危うさにさらされていたように私たちには思われた。

例えば、音楽の時間に、ハーモニカを口にくっつけてやってモ吹こうとはしなかったと、家でやらせるよう連絡帳の指示に、みんなの前に立たされてハーモニカを口に押しやられた隆の思いを想像し、担任教師の「愛」を感じられないなど。私たちは学校に話し合いを申し入れた。

校長、教頭を交えた具体的対応も含めた協議のなかで、担任教師の隆への並々ならぬ「愛」と努力を確認し、その表現方法について、特に教頭先生の示唆に富んだ指摘など収穫が多かった。それからの隆の学校生活に大きな効果をもたらした。

一方、父の薩夫と母落子の生活の中で、生活への責任と家族が共に暮らすことへの意欲と熱望が、確実に薩夫の精神的社会的などの自立を促した。落子の

家を建てる計画実現のために精力的に働き、貧しい関係の落子の親族との回復にも努め始めた。二学期が終わる、年末帰省は父母の暮らすアパートにした。

その工事の手伝い、足りない費用のことなどを薩夫が祖父に相談するなど、徐々に自然な関係の回復が兆して始めていった。

そして、新年度からの引き取りを目標に、薩夫と落子の親たちなどの関係を作っていくための働きを始めた。

時々、思い出すように隆は学校で不適応を見せたが、これまでとは異なり、自力で回復したり、課題解決のためにまともに努力するようになっていった。

入野の祖父母にとつて薩夫が家を出て他に家を構えることは、自分達が艱難辛苦して作り上げた身代を嗣ぐ者を失うことであつた。とうてい承服できないことであつた。また、事業を薩夫が一緒にやっていくことが大前提であり、営業に支障をきたし信用にも関わることで訴えた。

この夏休みも、隆は弟と、時には父母とも何回も遊びに来た。こぼれそうな笑顔で、祖父母とのかたちも伝えてくれた。

訪問を繰り返して祖父達の考えを聞き、父母の思いも伝えながら調整に努めた。

父親の自立は、確実に隆の自立を促し、家族に対する誇りをもたらしただけである。

薩夫が自分の力で家を建て、家庭を再構成することは喜ぶべきことであること。

子どもの自立にとって何よりも重要な要因は、自立した大人が形成する家庭で育ち、自立した教師の関わる学校での教育である。そこが子どもが日常生活する場面の大半なのであるから、家庭に代わって関わる私たちの自立こそが不可欠なのである。

日誌抄

五月一日
八月三十一日

五月一日 栗原さんよりいつものお励まし。ありがとう。

五日 第四回子どもまつりを、横浜のアルトサックス奏者飯田さんたちのバンド、田中さんたちトルコ民族音楽グループ、久喜高校音楽部のみなさんの参加を頂いて本格的な音楽祭として盛大に実施することができました。お友だちの参加も六〇人を超え、不動岡高校の有志のバンドの飛び入りも。八八会、GOGO会、虹の会、幼児グループの演奏やオペレッタ、ミュージカルなども喝采。賑やかで素敵なおまつりの一日でした。

七日 地元後援会準備会。会の会則や事業など設立にむけて子どもたちが生活する地元の方々の、ご理解を深める事業を基本にすることなどを協議。○町内佐波の杉田さんより鉛筆を頂く。感謝。

八日 鷲宮町の富松さんより大鏡を頂き、玄関に。感謝。

十・十一日 幼稚園保育参観。

小学校授業参観。とても心配だった子ども、はりきって。ホッ。先生方の力に脱帽、感謝。

○ピエロさんよりパンを。感謝。○高座渋谷教会より来訪。見学とお励ましを。感謝。

十五日・十六日 恒例の児童福祉週間記念事業の講演会を美深育成園園長木下茂幸先生をお迎えして。県内の養護施設職員一四名のご参加も。痛烈な刺激の二日間。

二十一日 小学校の家庭訪問がこの日から。新たな年度の子どもの様子が先生方のご苦労が。刺激を受ける。

○しずくの会（梅沢三保会長）の草取りご奉仕。暑い中を。

二十四日 行田市の大場さん来訪してお励ましを。感謝。

二十八日 江森理容店主のご奉仕。六月十一日 この日より夏休み

にできるだけ多くの子どもが家に帰る家族と過ごせるようにと願って家庭訪問を始める。

十三日 大根根剣友会青鹿氏より剣道用防具一式を頂く。

十六日 中学校家庭訪問を開始。二十一日 幸手市中川氏より衣類、町内久保田氏より防具一式を。

二二日 埼玉県指導監査。

二八日 トミザワスポーツ店よりスポーツ用品を沢山。感謝。

七月七・八日 鎮守のお祭。子ども会のメンバーの小学生がワッショイワッショイ。

十三日 しずくの会よりお励ましをいただく。感謝。

十四日 町内大塚氏よりじやが芋を沢山。ありがとう。

十六日 大根根剣友会早朝土用稽古。二〇日まで。

二十日 夏休みオープンニングフェスティバル。園庭に火を焚いてゆかた着て。

○町内奈良氏より本と野菜を。

二二日 県知事杯争奪近県剣道大会三・四年生の部で安田貴志優勝。やったぞ！バンザイ！

二十四日 中央児童相談所より三年生と四才の兄弟の入所依頼。○待ちに待った夏期行事第一弾 軽井沢行。幼児と虹の会が。タカラクラブのお招きで。

○おたふく風邪大流行の始まり。

二九日 夏期行事第二弾八八会八ヶ岳行。倉沢保母の親戚の家をお借りして。三〇日中学生男子と職員三名が主峰赤岳登頂に成功。（くら）

反射光

厳しいきびしい暑さの夏でした。特に関東平野の中心部に位置するこの地方は内陸型の気候で暑さ寒さがひときわ厳しいのです☆みなさんを始めとした多くの人々の沢山の善意と祈りによって、子どもたちはき

らめくような夏休みを充分に過ごすことができました。心から感謝します☆子どもたちが受ける不条理な負い目があったら何よりも優先してその負い目を担い自分たちに不都合があっても逃げないで解決に努めようと決意して年度を始め、もう半年が過ぎてしまいました☆子どもたちの負い目の多くは見落としてしまっただろうと反省しきりの養護計画の見直しをして残りの半年に備えています☆子どもたちの問題の多くは大人の問題です☆それを解決するには大人同士の厄介なやりとりをしなければなりません☆馴れあわないで本当の解決に心がけ続けたいと願います☆そんな私たちをどうかこれからもお支え下さい☆お支えやお祈りに応えるために更に自らをただしていきます。（哲）